

「男、突っ走る！」

第9回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

五十川	鬼頭	宮田	志田	濱口	木本	門野	木内	木内	木内
孝之	美彩	春奈	悠喜	寧々	賢瞬	賢哉	健次郎	真保	雅也
(16)	(16)	(16)	(16)	(16)	(16)	(16)	(12)	(43)	(16)
中央高校1年6組生徒	中央高校1年6組生徒	中央高校1年5組生徒	中央高校1年2組生徒	中央高校1年2組生徒	中央高校1年2組生徒	中央高校1年2組生徒	雅也の弟	雅也の母	中央高校1年2組生徒

1 神社

雅也がお参りに来ている。

雅也「（手を合わせて）今年も一年、健康で

元気に学校生活が送れますように」

2 中央高校・全景（朝）

3 同・1年2組教室

雅也が登校してくる。

雅也「あけおめ」

と、クラスメイトたちにそれぞれ声をかけていく。

雅也、席に座ると、賢哉のもとへ行き、

雅也「あけおめ」

賢哉「あけおめ。ことよろ」

雅也「うん、ことよろ」

と、空になった瞬間の席を見つめる。

雅也「年末から、休みがちになってるね」

賢哉「そうだな」

雅也「何か聞いてる？」

賢哉「……いや、特には何も」

雅也「そっか……」

難しい顔の雅也。

4 服屋

真保が待っている――試着室から、学ラン姿の健次郎が出てくる。

真保「ちよつと大きいかしら」

と、店員が出てくると、

店員「中学校の三年間で身長が伸びて成長することを考えたら、入学当初は少し大きいぐらいがちょうど良いんです」

真保「そうですか。確かに、成長期でいきなり身長が伸びる子もいますもんね」

店員「はい。ですから息子さんも、今は小柄かもしれませんが、三年間の間でお母さまの身長を抜くほど大きくなられるかもしれませんよ」

健次郎「母さん、俺このサイズで大丈夫だよ」
真保「分かったわ」

5 木内家・全景（夜）

6 同・居間

夕飯を食べている雅也、真保、健次郎。

雅也「そっか。健もいよいよ中学生か」

真保「あっという間よね」

雅也「部活は何入るか決めてるのか？」

健次郎「兄ちゃんと一緒のコンピューター部」

雅也「お前も入るのか。まあ、二つ下の後輩
たちが来年三年生になるから、連絡しとく
よ」

健次郎「ありがと」

真保「ねえ。小学校と一緒に、また運動会の
親子対抗競技とか出してもらうことになるか
もしれないけど」

雅也「（遮って）ああ、良いよ。どうせ、父
さんは来られないだろうし」

真保「ごめんね」

雅也「別に良いよ。俺以外にも、結構親より

も兄弟が参加してる人見るもん。健と同年の弟や妹を持つ俺の同級生だっているんだから、そういう時はその子たちも誘っていけば楽しくなるだろ」

真保「それもそうね。そうやって、雅が気楽に考えてくれてるから、母さんどれだけ助かってるか」

雅也「父さんが帰ってこれないのは仕方ないことですよ。それを攻めたところで、どうにかなるわけじゃないんだから」

真保「……」

雅也「母さんにとっては面白くないことかもしれないけど、父さんだって好きで単身赴任してるわけじゃないんだから」

真保「そうね。まあでも、一人暮らしだからかえって自由に満喫してるわよ。昔からタフで、仕事も遊びも忙しいぐらいやっちゃう人なんだから」

健次郎「確かに野球も釣りもして、子ども会とかPTAもやってたんでしょ」

雅也「確か、役員やってたのは俺が小学校の三年か四年の時だったかな」

真保「仕事の時はそうでもないのに、それ以外のことになるよと外面が良いから、いろんな役受けちゃうのよね。だから、子ども会の副会長やってるときに、掛け持ちでPTAの書記なんかやってたのよ」

雅也「そういうところ、俺が似たのかな」

真保「え？」

雅也「俺も、部活の部長やったり、クラス役員やってきた。今年なんて、学級代表の子が謹慎処分中、学級代表代理っていう元々ない役職頼まれた。別にリーダーには向いてないって思ってるんだけど、何故かそういう話が来るんだよね」

真保「それぐらい、あんたを期待してるってことよ」

雅也「そうかな……」

真保「役職とか頑張ってたら、就職の時も有利になるんだもの、やれるだけのことはや

つてみたら」

雅也「うん、そうする」

7 同・健次郎の部屋

健次郎が漫画を読んでいる——ノック

して雅也が入ってくる。

雅也「まだ起きてたのか」

健次郎「これ読んだら寝る」

雅也「そっか」

健次郎「どうしたの？」

雅也「いや、電気ついてたから、どうしても

のかなと思って」

健次郎「ふーん」

雅也「お前、本当に兄ちゃんと同じ情報科学

部に入るのか？」

健次郎「そのつもり」

雅也「どうして入りたいんだ？」

健次郎「俺、パソコン好きだから」

雅也「そっか。でもパソコンが好きだけじゃ、

部活はできないんだぞ。文字を打つスピー

ドが少しでも早くなるようにタイピングの練習したり、中学生から受験できるパソコンの検定勉強だつてしなくちゃいけないんだよ」

健次郎「お兄ちゃん、高校でも同じようなことやってるよね」

雅也「まあ、言われてみればそうかもしれないね。いつの間にかパソコンが好きになって、気が付けば検定勉強するうちに、パソコンを使った仕事ができるようになっていたって思うようになった」

健次郎「小学校の時から、文字打つの早かったよね」

雅也「うん。あれも、才能だったのかな。父さんや母さんは、運動部出身だっただろ。けど兄ちゃんは、全く運動のできない子どもになった。父さんの好きな野球選手が、兄ちゃんの名前の由来だつて言うのに、名前負けていうのはこういうこと言うんだろうね」

健次郎「俺も何か得意なこと見つけられるかな？」

雅也「見つけられるよ。兄ちゃんなんか小学校の時、まさか自分がこんなにもパソコンにどっぷり浸かった生活するなんて思ってもみなかったもん。中学校に入ったら、自分でやってみたいことも見つかるさ」

健次郎「そうだと良いけど」

雅也「さ、早く寝ないと。明日も学校あるんだから」

健次郎「うん」

雅也「じゃ、お休み」

と、健次郎の頭を撫でると出ていく。

8 中央高校・全景（朝）

9 同・コンピューター室

検定勉強をしている雅也、孝之、美彩、
春奈。

孝之「かどけん、今日も休み？」

雅也「どうせ競艇場行ってるんじゃないの」

孝之「学校は来てた？」

雅也「来てたよ。けど、もう検定受けるつもりがないから、部活に来ても意味がないって思ったんじゃないのかな。野球部から転部してきて、こっちでどんな風に活動するかと思ってたけど、やっぱり長続きしないか」

孝之「まあ、かどけんは気分屋なところがあるからね」

雅也「中学の時から、そんな感じだったの？」

孝之「そういう節はあったかもですね」

雅也「まあ、それでも憎めないのが、かどけんの人柄なのかもしれないね」

美彩「ねえパンテーン」

雅也「どうした？」

美彩「(テキストを見せて)ここ全然分からない。二級になるとこんなにもレベル上がるんだ」

春奈「私、今回ばかりは受かる気がしない。

全然用語も覚えられないし、操作方法も複雑すぎて……これじゃ、筆記も実技も落ちるかも」

孝之「何弱気なこと言ってるんですか」

雅也「そうだよ。ちゃんと頑張れば、合格できるとって」

美彩「そりゃ、五十川やパンテーンは地頭が良いし、元々パソコンが得意から良いけどさ、私たちはそこまで得意じゃないから」

雅也「でもせっかく勉強してるんだったら、やるだけのことはやってみようよ。そりゃもし不合格になったら、その時はその時だけど、初めから落ちるつもりで受験するぐらいならやらないほうが良いでしょ。時間の無駄だと思うし」

孝之「木内君のおっしゃる通り」

春奈「まあ、そうかもね。今こうやって勉強してることを最初から無駄にするぐらいなら受けないほうが良いもんね。ありがとう、何かエンジンかかった気がする」

雅也「それは良かった」

孝之「あ、木内君。来年度の部活のことなんだけど、顧問の三人で相談して、僕が部長で木内君が副部長って形で方向性決めるって」

雅也「え、俺が副部長？」

美彩「良かったじゃん」

雅也「まあ、部長よりかは気は楽だけど」

孝之「僕も木内君が副部長だったら安心して部長ができますから」

雅也「五十川君がそう言うならね……」

春奈「やっぱりパンテーンには、そういう役職が向いてるんだよ」

雅也「そうかなあ……」

春奈「前に学級代表代理やってたでしょ。そういう経験があるってことは、大丈夫ですよ」

雅也「でも俺は、あんまり先頭に立ちたくないんだよね。前に濱口から聞いたんだけど、俺はどうやら二組のお母さんっていう存在

らしいから、陰ながらこっそりとみんなを支えるポジションで十分だもん。ちよつと世話を焼くおばさんで良いの」

孝之「そういう存在が、男子が多い二組には必要なんだよ。緩衝材になってくれる人が」
雅也「俺、自分では全く緩衝材になってる感覚ないんだけどね」

笑い合う一同——と、ノック音がし、
寧々が駆け込んでくる。

寧々「木内、大変ッ……」

雅也「濱口どうしたんだよ、そんなに慌てて」

寧々「志田が……志田が……」

雅也「志田がどうしたんだよ」

10 同・1年2組教室

悠喜がロッカーの荷物を整理している

——雅也と寧々が駆け込んでくる。

雅也「志田、何があったの。謹慎って、一体
どういうこと」

悠喜「大したことないよ」

雅也「大したことなくて謹慎になんてなるわけがないでしょ」

悠喜「ちよつとした痴話喧嘩だよ。ただ、ちよつとやりすぎて相手殴っちゃってさ」

雅也「（呆れて）何やってるんだか……」

寧々「相手は大丈夫なの？」

悠喜「別に病院送りにするほど殴ったわけじゃないから。ただ、一発か二発殴っただけ」

寧々「それでも相手殴っちゃったら、どうしようもないでしょ」

雅也「こういう時って、喧嘩両成敗で向こうも謹慎になるの？」

悠喜「元々向こうが吹っ掛けてきたからな。原因は向こうだ」

寧々「売られた喧嘩を買っちゃったわけだ」

雅也「馬鹿だね……そんなもの買わなければ謹慎になんてならないのに」

悠喜「別に俺は気にしてねえよ。かえってお前らが大袈裟なんだよ」

寧々「だって……ねえ……」

雅也「普段一緒にいる子が、いきなり暴力沙汰起こして、謹慎になるなんて聞いたら心配するに決まってるでしょ」

悠喜「（笑って）それは、わざわざご親切に」

雅也「真剣に聞いてよ。こっちは真面目に話してるんだから」

悠喜「まあ、しばらく休むんでよろしく」

雅也「そんな呑気な……」

悠喜「謹慎課題さえやれば、後はどんな風に過ごしても良いんだって。木内も一回謹慎経験してみたらどうだ。気が楽になるぞ。」

「じゃあな」

と、荷物をまとめて呑気そうに帰っていく——啞然としている雅也と寧々。

寧々「相変わらず、志田もブレないねえ」

雅也「あんな呑気に謹慎受け入れるなんて信じられないわ」

寧々「木内の周りって、何でもこうブレない人が多いんだろうね」

雅也「本当だよ。何か周りで問題が起きるた

びに、俺一人だけが大笑に心配してバカ
みたいじゃんか」

寧々「そんなことないよ。みんな口では平然
としてるけど、心から心配してくれる木内
の存在をありがたいと思ってるんだから」

雅也「どうだかね。そんな温情を持つてるよ
うなメンツではないと思うけど」

寧々「それでも誰からも心配されないよりは
マシでしょ。今だって、私が木内に報告し
たら、すぐに飛んできたじゃない。志田に
とっては、そういう木内の行動が嬉しいん
じゃないかな」

雅也「問題起こすたびに、俺はみんなに対し
て呆れてるの。でも、嫌いにはなれない。
むしろほっとけないというか、何かしてあ
げられることはないかって考えちゃうんだ
よね」

寧々「どこまでお人よしにできてるんだか、
木内の人間形成は」

雅也「やっぱり、大事なクラスの仲間だから

っていう意識があるからかもしれない。全然どうでも良い関係だったら、謹慎になろうが退学になろうが全く気にしないもの」

寧々「そりゃ、入学当初から関わってきてもうすぐ一年になるんだもん。クラスメイトに対して情が入るのも無理はないか」

雅也「そうだろ。だから俺は、かどけんやきのしゅんが謹慎になった時も心配したし、正直きのしゅんが最近不登校になってることも心配してる。どうしてみんな、平和に学校生活を送ろうって思えないのかなあ」

寧々「まあ、若気の至りってやつでしょ」

雅也「え？」

寧々「あと何年かすれば、あの時の自分は情けなかった、恥ずかしかったって振り返る時が来るわよ」

雅也「どうだろうね。あの子たちのことだから、笑い話にしかならないと思うけど」

寧々「それもそれで良いじゃない。あの子たちらしくて」

雅也「（ふと微笑んで）そうだね。かえって反省すると、らしくないもんね」

寧々「そうだよ」

雅也「早く戻ってきてほしいよ、周りの子が謹慎になって学校来なくなると、寂しいんだから」

寧々「木内……」

雅也、空になった志田のロッカーを見つめている。

11 門野家・賢哉の部屋（夜）

賢哉が携帯電話で話している。

賢哉「え、志田が謹慎？」

雅也の声「そうなの。喧嘩して相手殴っちゃったんだって」

賢哉「とうとう志田も謹慎かぁ」

雅也の声「何でそんな嬉しそうなんだよ」

賢哉「次は木内が謹慎じゃねえか」

雅也の声「俺は謹慎になるようなことはしません」

賢哉「今日から謹慎だと、復帰は二月末ぐらいか？」

12 木内家・雅也の部屋（夜）

雅也が携帯電話で話している。

雅也「多分、それぐらいになるんじゃないかな。本当に、かどけんといい、きのしゅんといい、謹慎になったっていう話聞きたびにあたふたするこっちの身にもなってほしいわ」

賢哉の声「謹慎になっちゃったものはしょうがないだろ」

雅也「開き直らないですよ。こっちはね、謹慎になるたびに、ちゃんと戻ってきてくれるのか、そのまま学校をやめないかって、心配しちゃうんだから」

賢哉の声「考えすぎなんだよ。志田のことだから、別に謹慎になったからって、大してへこんでる感じではないだろ？」

雅也「まあね。謹慎課題さえやれば、後は自

由に過ごせるからって……謹慎を長期休暇
だと思ってるのかね。優雅な暮らししてる
ような言いぐさだったよ」

13 門野家・賢哉の部屋

賢哉「あいつらしいじゃねえか。普通に謹慎
課題やって、ちゃんと帰ってくるさ」

雅也の声「そうだと良いけど。かどけんから
も、志田に連絡してあげてね」

賢哉「俺が何してやるって言うんだ」

雅也の声「例えば、謹慎課題を早く進めるコ
ツとかさ」

賢哉「そんなものあるわけないだろ。とにか
く課題を進めるしかできないんだから」

14 木内家・雅也の部屋

雅也「それもそうだね。まあ、ちゃんと課題
やって復帰してくれば、それで俺は十分
だから」

と、雅也の携帯電話に瞬からのキヤツ

チが入る。

雅也「ごめん、きのしゅんから電話かかってきた。また後でかけ直す。じゃあね。（と携帯電話のボタンを押して、瞬の着信を取ると）もしもし、きのしゅん？どうした？」

瞬の声「あのさ、うっちー」

15 夜の街

瞬が歩きながら携帯電話で話している。

瞬「俺、四月からクラス替えすることにしたよ」

16 木内家・雅也の部屋

雅也「……」

唾然としている雅也。

つづく